

St. Luke's International University Repository

助産の技

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 香代, Sato, Kayo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00014948

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



助産の技

佐藤香代¹⁾

1. 助産の起源

太古より女性は、家族や出産経験をもつ女性の援助を受け、自宅や産小屋で子どもを産んだ歴史をもつ。女性たちは経験によって得た智慧を、共に分かち助け合ってきた。体験による体感としての智の伝承、これが助産のはじまりである。すなわち助産の対象は病をもった者ではなく、産む力をもった健康な女性であり、サポートする者もまた力をもつ女性である。出産は地域共同体のなかで生活の一部として行われ、それは女性のネットワークによって支えられていた。このように助産のルーツは医学や看護とは異なっている¹⁾。

2. 助産師とは

「助産師」は、英語で“Midwife=with woman”，仏語では“Sagefemme=賢い女性”という。日本では産婦を助けるから「助・産婦」と述べる者もいる。つまり女性に添い助ける智慧をもった女性を意味している。助産師は西洋で魔女裁判にかけられた歴史をもつが、女性のパワーを拓く力をもった存在であったからこそ、怖れの対象となったと考えられる。

妊娠した女性には産むための生理的な機能が備わっている。その身体は出産に向け準備を行い、後の授乳・育児に適応できる仕組みを用意している。身体が本来もつ「産み育てる力」を信頼しその開花を助け、女性が自分の道を探していく道程を併走する者が助産師である。妊婦は自らの身体を最もよく知る者で、助産師は女性を管理するのではなく、手助けの役割を担う。したがって助産の実践は助産（ホリスティック）モデルで展開される。女性の力を信頼し添うことが助産の揺るぎない哲学であり、助産の技である²⁾。しかしこれは簡単なようで意外に難しい。

3. 助産の技

助産師は実践で技を洗練していくことで、助産の本質を知る。筆者は「技」とは身体全体で会得する実践智と考える。以下筆者の助産体験から、卓越した助産の技とは何かを述べてみたい。

1) 何もしないことほど与えるものは大きい

英国の助産師 Leap は 1990 年の ICM において上記の

演題を発表した³⁾。これはもちろん妊婦をほうっておくという意味ではない。妊婦は本来自分がどうしたらよいかわかる存在である。指導されずとも身体の変化に対応し行動できる。答は自らのなかにある。助産師は女性が産む力を最大限に発揮できる環境を用意すればよい。力を得る過程を阻害しないことが重要である。

この言葉をヒントに、筆者は 1996 年から「世にも珍しいマザークラス」を開催している。ここでは、妊婦が身体で感じる過程を支え、干渉・指示・指導をしない。ひたすら肯定的な関心を寄せ最高の聴き手に徹する。そしてどのような状態であっても受け入れる。女性をジャッジしないことである。女性は、無条件にあるがままの自分を受け入れられ愛しまれる体験をすることで、変わっていく自らの身体を信頼し、今起こっている現象を受け止める。そのことはありのままの自分と子どもを受け入れることにつながっていく。そして自分を愛しむ出産や親になる意味を知るのである⁴⁾。

2) 助産を意識させない技

英国の文化人類学者 Kitzinger は、老子の言葉を引用し助産を説明している。「子が生まれるのを助ける助産師よ。誇示せず騒ぎたてず、立派にやり遂げよ。こうなるはずだと考えるより、現におこっていることを、楽に進めるように援助せよ。あなたが先導しなければならぬなら、母親が援助されながらも、自由と自主性を感じられるように先導せよ。そうすれば子が生まれたとき叫ぶだろう。『自分でやったんだ』と…」⁵⁾。

女性が助産師の存在を意識せず「自分で産んだ」と思えたとき、それは卓越した技と呼べる。助産師は表舞台には立たない黒子である。見守り、待ち、愛しみ、思いやりを提供し、常にもの静かで指図をせず、女性が没入状態に入ることを邪魔しない。女性が傍にいてほしいと願う女性である。

身体に向き合い身体を拓く出産をした女性は、自分の身体のもつ力や胎児の力を感じとる。この経験は、女性がその後生きるうえでの軸となり力となりうる。たとえばその後続く育児や困難な状況に出会っても、身体を信頼した経験に戻っていくことができる。

3) 優れた型としての技

長い間培われてきた開業助産師の技は理にかなった巧みな動きをもった技である。技は身体智として身体が覚えることを意味し、あえて意識したり身構えたりしなくても、身体が勝手に動くまでになることをいう。いわば

1) 福岡県立大学看護学部

伝統芸道や職人技である。

技はシンプルな原理で優れた「型」をもつ。この型を身につけるには、学習者はまず形をまねぶ、つまり「模倣」からはじまり、繰り返し反復することで自分の「型」を見つけ、習熟の域である「技」へと到達する。未熟と習熟の相違は美しさと合理的にある。技の微細な感覚を学ぶには、修行といえるような場と空間の教育力と時間、型の反復が求められ、意識し根拠を求める作業と無意識の間を往復しながら習得される。

ここでは筆者らが開発した「児の母乳吸啜メカニズムに基づく乳房ケア＝BS ケア (Care based on the Breast-feeding Infants' Suckling Mechanisms)」を例にとり説明する。BS ケアは延べ 25,000 人のケア経験から編み出された「型」としての技である。開業助産師の実践からの気づきは、母乳育児の要は児の吸啜にあるというものであった。BS ケアは乳房に起こった現象を、児の母乳吸啜を模倣した指の動きで解決に導く。しかもこれは、従来から母親たちが最もつらいと訴える「痛い」マッサージではない。児吸啜の模倣であるため、母親は「まったく痛くない」「気持ちがいい」「赤ちゃんに吸われているみたい」という感想を述べる。

BS ケアはシンプルな原理ゆえ簡単に学ぶことができ、習ったその日からケアできるようになる。しかし提唱者のような、無駄のない、身体と響応する美しい動きに到達するにはやはり時間と反復が必要である。BS ケアセミナー参加者の習得度を観察していると、真摯に技をまねぶ、すなわち「型をくずさず、型に戻る」その反復がいかに重要であるかがわかる。

BS ケアは、乳房に起こった炎症や痛み、うっ血などを「トラブル」とは捉えず意味ある現象と考える。さらに常に母親と子どもから学び、基本は自らの身体力で癒していくことである。すなわち助産哲学に基づくホリスティックケアである⁶⁾。技は、助産哲学に基づいた独立した実践のもとに包括されてこそ「助産実践の智」となりうる。

4. 助産実践の智をどう伝えていくか

多くの助産師は今、女性が生理的に自分の力で出産できることを信じられなくなっている。その理由に実習や臨床実践が医療モデルのなかで行われることがある。彼

女らは正常分娩におけるロールモデルをもたず、よって助産の意思決定や実践に責任をもつ能力が欠如することになる。結果的に助産師の介入が、正常な出産の行程から外れさせてしまうことさえある。

筆者は医療のなかでの妊娠・出産と助産所や自宅でのそれはまったく別物だと感じている。したがって助産の教育はどちらを選択あるいは優先するのか、どちらを先に学ぶのか十分吟味する必要がある。そこで問われるのが「専門性とは何か」である。体験を前提とした「技」特有の習得プロセスの分析は、現在常識とされている学習理論の検討の契機となる。すなわち助産における新しい「知」のあり様や創造的な実践教育に、多くの示唆を与えてくれる。

助産の技は根拠に基づくものでなければならないが一方では助産の本質ともいえる「不確かさ」を有している。助産は、女性と助産師が共に思うようにならないものを引き受け育んでいく、不確かさを抱き合うプロセスといえる。

ある母親が「お産は生き方」と語ってくれた。女性の人生にかかわる重みと幸せを感じている筆者は「助産は生き様」と表したい。

引用文献

- 1) 佐藤香代, 日本助産婦史研究, 東銀座出版社, 1997.
- 2) 佐藤香代, 助産婦は正常産の専門家, 助産婦雑誌, 54(12), 27-33, 2000.
- 3) Leap, N., The Less We Do, The More We Give, Proceedings of the International Confederation of Midwives 22nd International Congress, 118-120, 1990.
- 4) 佐藤香代他, 「身体感覚活性化プログラムによるマザークラス」に参加した妊婦の身体感覚, 母性衛生, 45(4), 551-559, 2004.
- 5) Kitzinger, S., ed., 1988, 高見安規子監訳: 助産婦の挑戦, 9-10, 日本看護協会出版会, 1990.
- 6) 佐藤香代他, 児の母乳吸啜メカニズムに基づく乳房ケア, パリネイタルケア, 22(6), 571-575, 2003.